

園の取り組み事例①

三宅町立三宅幼稚園（奈良県・公営）

細やかな家庭支援と 発信力の強化で 子どもの育ちと保護者を支える

取り組みの ポイント

- 日常の家庭支援や会話を通して関係性を深め、「一緒に子育てをしていきましょう」というメッセージを伝えて、保護者の精神的な支えとなることを心がける。
- ドキュメンテーションや動画配信を通して、日々の保育や行事のねらい、子どもの育ちなどを共有し、保護者と目線を合わせる。

保護者の悩みや不安に寄り添いながら、共に子育てをする

町ぐるみで子育てをする一体感の 一方で、距離感が近いゆえの難しさも

野球のグローブの生産地である奈良県磯城郡三宅町は県北西部に位置し、人口約6,500人、面積約4km²という自治体です（2023年10月時点）。三宅町立三宅幼稚園は町にある唯一の認定こども園。町にはほかに0～2歳児を対象とした小規模な保育施設はありますが、町内の子どもの多くが三宅幼稚園に通います。町の小学校も1校だけのため、子どもたちはほぼ同じ顔ぶれで育っていきます。

三宅町健康こども局の局長で、2023年度は同園の園長を兼任する植村恵美先生は、保護者を取り巻く状況について次のように説明します。

「子どもの数が少ないこともあり、行政は妊娠中から個々の保護者の子育てを支えています。出産後は健康こども課の保健師、その後入園児の保護者には本園を始めとした保育施設、また、未就園児の保護者には町の子育て包括支援センターが、中心となってサポートします。そのように町全体

お話ししてくださった先生方



園長
植村恵美先生



家庭支援担当
大濱幸枝先生

で一体感をもった子育てができる半面、人間関係が固定化しやすく、いったん関係がこじれると修復に時間がかかるといった難しさもあります」

そうした状況を踏まえ、かねてより同園では保護者一人ひとりと向き合い、よい関係をつくることを心がけてきました。

「家庭支援」専任の保育者が 担任とタッグを組んでサポート

同園で保護者を支えるしくみの1つが、家庭支援推進保育士の存在です。それぞれの保護者が抱

える悩みや不安に対応するため、専任で家庭支援を担当する保育者を置き、個別の生活環境を把握した上で相談に乗るなど、手厚いサポート体制を敷いています。

「町内唯一の公立認定こども園という性格上、本園にはさまざまなタイプの保護者が集まります。それぞれの子育てに関する困りごとに寄り添いながら、園の方針を理解していただき、保護者にも成長していただくという、いわゆる『親育ち』をサポートする役割を果たしていきたいと考えています」(植村園長)

2022年度より家庭支援推進保育士を務めている大濱幸枝先生は、近年の保護者の傾向について次のように話します。

「核家族化が進み、特にここ数年はコロナ禍の影響で子育てを通じた交流の場が減ったため、目の前のわが子しか知らない保護者が増えていると感じます。そうした環境で育児をしていると、『子育てのしかたがわからない』『発達が遅れているのではないか』といった不安や心配を抱え込み、インターネットで得た情報をうのみにすることも少なくないようです」

子育てに悩んでいたたり、家庭環境に課題があったりなど、さまざまな要因で支援を必要とする保護者の存在には、日常的に接している担任が気づくケースがほとんどです。初めは担任がサポートしますが、状況が改善しない場合は大濱先生も入って面談を行います。そして、保護者の状況に応じて、子どもの育ちや様子について伝えたり、家庭での接し方のアドバイスをしたりします。家庭での実践が難しい保護者には、園でやってみたときの子どもの姿を伝え、少しずつでも家庭で取り組んでもらえるようにサポートします。そうして、「一緒に子育てをしていきましょう」というメッセージを伝えています。

「保護者にとって家庭支援推進保育士は、担任とは異なる立場だからこそ話せることもあり、必要なポジションだと感じています。担任とも密に連携をとり、保護者の精神的な支えとなることをめざしていきたいと思います」(大濱先生)

園内の療育教室で 保護者を含めた連携がスムーズに

同園では、発達に気になる点のある子どもと保護者への支援にも力を注いできました。その中心となる取り組みが、15年ほど前から実施している「療育教室」です。以前は町外に開設されている通所施設へ、親子通園として保護者同伴で通うことしかできませんでした。しかし、「仕事があるので参加しづらい」「施設が遠くて、子どもを連れて行くのが大変」といった悩みをもつ保護者が多く、園内に教室を開設することにしたのです。

「保育を通して『言葉の発達が遅れている』『友だちとのかかわりが難しい』といった課題が見られる場合、保護者との個人面談で家庭での様子や困りごとをお聞きします。そして、必要に応じて町の公認心理師による発達検査を受けていただき、療育教室への参加が望ましい場合にご案内しています」(植村園長)

療育教室は、週1回、対象となる子どもが保育時間中に別プログラムとして参加し、保育者や公認心理師、作業療法士などが協働して、さまざまな発達支援を行います。通常、保護者は参加しませんが、学期に1回、参観と懇談会を実施しています。園内で療育教室を実施する何よりの利点は、日常的に子どもと接する保育者と各専門職、さらには保護者との情報共有がスムーズになり、一人ひとりに合わせた支援を行いやすい上、その後の変化も園と家庭の両面から捉えられることです。また、各保育者も、支援をする中で発達に関する専門的な知識を身につけていきます。

「常に保護者と目線を合わせた発達支援を行い、家庭での接し方についても専門スタッフを中心にアドバイスします。

こうした支援を通じて、保護者が1人で悩みを抱え込むケースをできるだけ減らしたいと考えています」(植村園長)



保護者と保育のねらいを共有し、子どもの主体性を育てたい

定期的な園内研修をきっかけに 情報発信の方法を強化

保護者支援として細やかな取り組みをしてきた同園ですが、保護者との関係性をさらに進めるきっかけとなったのが、2021年に大阪教育大学の小崎恭弘先生が代表を務める一般社団法人NECQA（保育士と保育の質に関する研究会）から講師を招き、定期的に園内研修を行うようになったことです。同園では子どもの思いや興味に寄り添って主体性を伸ばす保育を大切にしてきましたが、これまでは保育者が自ら考えて動くというよりも、管理職が決めた方針に則ることを第一に保育を実施していたことに課題がありました。

「子どもの主体性を伸ばすのなら、先生方も主体的に保育に取り組んでいく必要があると考え、そういった方針のもとで園内研修を行うようにしました。すると、研修で環境設定のしかたや、ドキュメンテーションによる保護者との共有方法などを

学ぶ中で、先生方はそれらを保育にどのように取り入れて生かせばよいか、自ら考え、構成していくようになりました。先生方が変化する中で、子どもにもまた、自分で遊びを見つけて深めていく力が育ちつつあります。そうした姿を保護者にも積極的に発信する方法を工夫して、『一緒に子どもの主体性を育ていきましょう』というメッセージを送っています」（植村園長）

現在は、日常的な子どもの姿を伝えるために、ドキュメンテーションと保育動画の配信という2つの方法を取り入れています。

ドキュメンテーションは以前より作っていましたが、定期的な園内研修を始めた時期からは、子どもの主体性が発揮された場面を意識して取り上げるようにしています。写真を多めに掲載するとともに、子どものつぶやきや思いなどのコメントを入れて構成します。作成にかかる負担が大きくならないよう、頻度は保育者に任せており、各クラスは月1回ほどのペースで発信しています。

1 歳児

▼色の変化に興味津々



保育者が赤い粘土に赤色の貝を混ぜていると、色の変化に興味を持って前のめりに空気が乾燥している様子を見ている。赤い粘土とオレンジ色の貝を混ぜて赤い色を混ぜていく。赤い色の粘土の上に赤い貝を混ぜた。

▼友だちの様子を見て、自分もやってみよう！

2 歳児



かー！


きょりやう ついでよ！

▲ほく、恐竜だって作れちゃうんだ

▼紙粘土の感触が楽しい



はじめは粘土を触って見ている。粘土が柔らかい感じが気に入っている。粘土を触ると、粘土が柔らかい感じが気に入っている。粘土を触ると、粘土が柔らかい感じが気に入っている。



自分なりに工夫してみた

紙にくっつけて、絵のような作品を作ったよ！

わんこのなかにどんでりいれちゃう...

写真 作品展では「紙」を素材に、各年齢の子どもたちの作品とともに、その背後にある育ちを伝えるドキュメンテーションを掲示しました。写真は、1歳児と2歳児のドキュメンテーション。紙粘土そのものを楽しんでいた1歳児が、2歳児になると自分なりの作品を作るようになるという、子どもの発達の様子を保護者に伝えています。

子どもの発達を伝える作品展で 保護者の理解を深める

園行事を通した子どもの育ちも、ドキュメンテーションを通じて効果的に伝えていきます。同園には毎年11月に保護者を招いて子どもの作品を見せる作品展があります。2023年度の作品展では、子どもの発達の様子を保護者に伝えたいという保育者の発案で、すべての年齢で「紙」という同じ素材をベースに作品を作ることにしました。0～2歳児は紙粘土、3～5歳児は段ボールなども使って、年齢ごとにどんなことができるかがわかる作品を展示。さらに、子どもが作品に向き合う姿、保育者が感じた子どもの育ちなどを発信するドキュメンテーションを作りました(写真)。ドキュメンテーションには、0～2歳児は保育者の感じる子どもの思いを記し、3～5歳児はクラスごとに活動のポイントや子どもの姿をまとめています。それを作品とともに掲示し、ぐるりと一周すると、0歳から5歳までの発達がわかるように配置しました。

「保護者はわが子を見て、『〇歳だから、これができるとおかしいのだろうか』などと不安を感じてしまうことがあります。この作品展では、『各年齢で何ができるのかがよくわかった』という保護者の発言が聞かれるなど、発達に関する理解が深まる様子が見られました」(植村園長)

気軽に見られる動画を配信し 保護者と目線を合わせる

子どもの姿を共有するために、2022年度から動画の配信も始めました。園向けの業務支援ツールの動画配信機能を活用し、月に1～2回、クラスごとに届けています。水遊びや落ち葉遊びなど、季節のテーマを大切にしたり遊びや活動の場面を中心に取り上げており、保育のねらいや子どもの姿

について説明する文章も添えています。

「お迎えが遅い時間帯になる保護者は、ドキュメンテーションをゆっくり見られなかったり、掲示している教室まで足を運ばなかったりすることがあります。業務支援ツールは、保護者が日常的に目を通す事務連絡などにも使っているため、動画も気軽に視聴してくれています」(植村園長)

子どもの主体性を伸ばす保育は、保護者には遊んでいるだけのように見えることもあります。ドキュメンテーションや動画を通して、子どもの姿とともに保育者の考えを共有することで、さまざまな遊びや活動に明確な計画やねらいがあることが伝わりやすくなりました。最近では、園の活動に関連する工作を家庭でも作ってみたいと保護者が教えてくれるなど、少しずつ保護者と園が同じ方向を向いて子どもにかかわるようになっていきます。

保護者への情報発信に力を入れるようになり、保育の質の向上がもたらされるという好循環も生まれています。

「保護者への説明を意識して、先生方が一人ひとりを丁寧に見取り、成長を支えられるようになりました。先生同士が子どもの姿や育ちについて、活発に語り合うようにもなっています」(植村園長)

こうしたさまざまな取り組みの土台として、日々しっかりと保護者と向き合い、会話をすることの大切さを痛感していると、植村園長は話します。

「保護者はそれぞれ異なる生活環境や背景を抱えており、同じ言葉で伝えても、理解していただけない場合もあります。私たちの価値観や考え方を押しつけるのではなく、まずは保護者のありのままの思いや意見に耳を傾けることから、すべてが始まるのだと思います。そして、園として何ができるのか、どう寄り添えるのかを考えて会話を交わしていくことで、少しずつ保護者との関係性は深まっていきます。まさに私たちの価値観の多様性、柔軟性が問われていると思います」

幼保連携型
認定こども園
三宅町立三宅幼児園

子どもが興味や思いに沿って遊びを深める時間を大切に、主体性を伸ばす保育を展開している。週1回、園内で療育教室を実施し、対象となる子どもの発達支援を行っている。

◎ 園長：植村恵美先生
◎ 所在地：奈良県磯城郡三宅町伴堂 703-1
◎ 園児数：190人(2024年2月時点)